

ハンカチ形の 海の思い出

森 百合子

絵 岩淵慶造



ハンカチ形の海の思い出



ハンカチ形の海の思い出

1984年6月24日 初版第1刷発行

定価980円

著者 森 百合子

発行者 山本 康雄

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21(郵便番号112)

電話 東京03(945)1111(大代表)

振替 東京8-3930

N. D. C. 913 222p 22cm

印刷所 株式会社 廣済堂

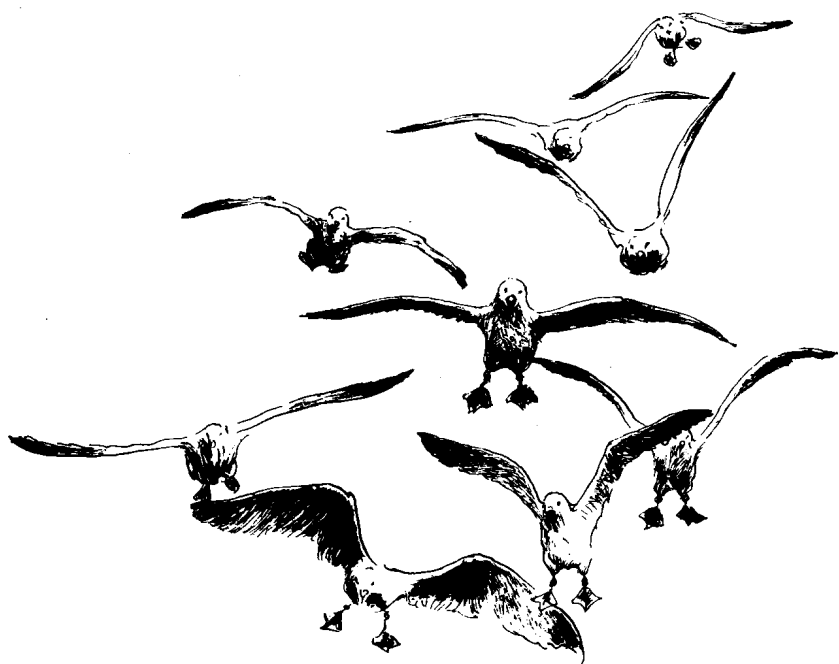
双美印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

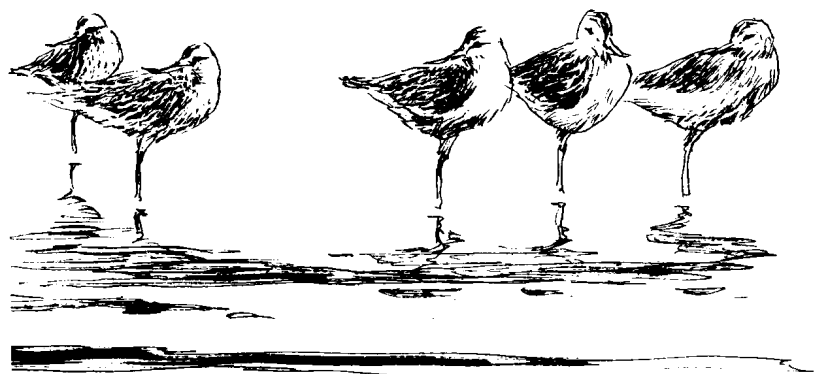
© YURIKO MORI 1984 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にておとりかえます。

ISBN4-06-119074-1 (0) (児一)



- 1 ベランダからのふしぎなけしき……………6
- 2 アシが一ゆれして人間に……………23
- 3 アシぶえが空に鳴りひびく……………41
- 4 雪の干潟でどろにまみれ……………56
- 5 お母さんの声がきこえたくらいで……………74
- 6 三さいと二十八さいの友だち……………92
- 7 丘の上にまう白い花びら……………109
- 8 タンポポ原をあらすもの……………128



9 おひめさまみたいなお客さま………

148

10 ブルドーザーはこぶしをふりあげた………

169

11 ひなたちは力強く育って………

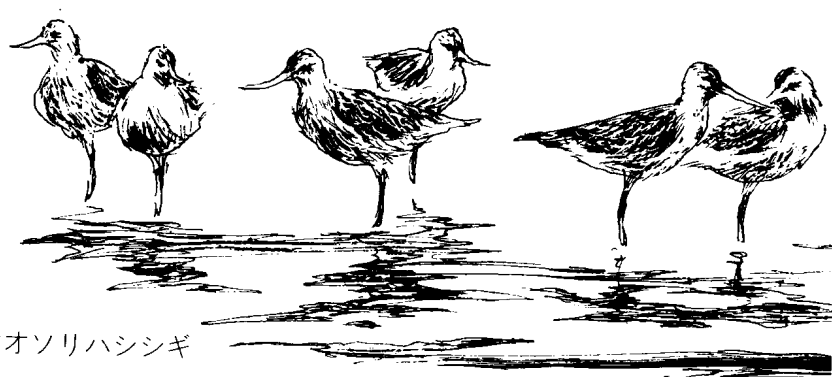
186

12 干潟を秋風がふきぬける………

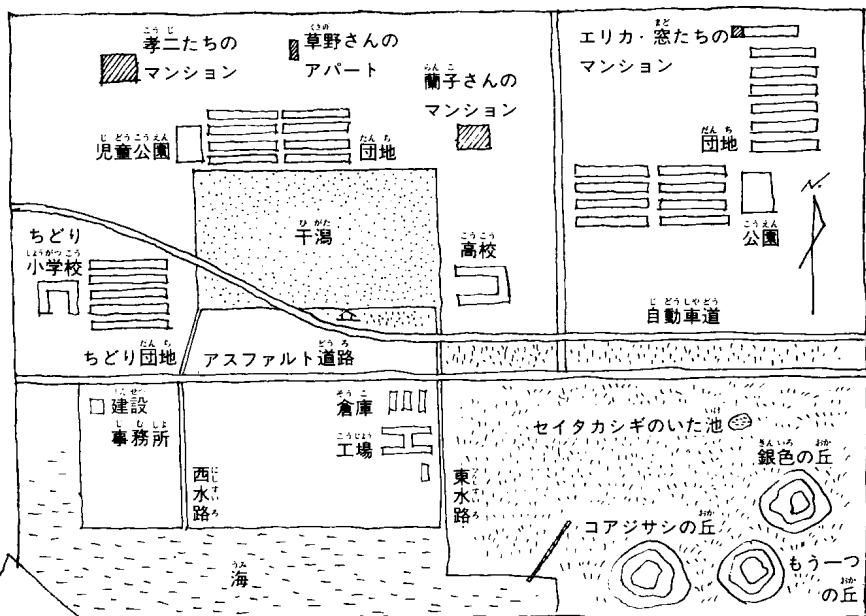
202

おわりに………

220



オオソリハシギ



ハンカチ形の海の思い出



1 ベランダからのふしぎなけしき

「お母さん、お母さん、きてごらん。あれはなあに？」

エリカはベランダからふりかえって、大声をあげた。

「なんだ、なんだ。どうしたんだ？」

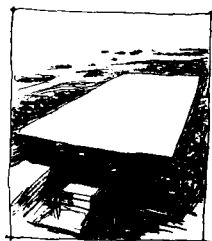
お母さんではなく、窓兄ちゃんがベランダへでてくる。

「ほら、あそこ……。あれ、なにかしら？」

エリカの指先を、窓は目で追う。

団地の十一階。足もとからひろがっている色とりどりの家の屋根は、つみ木のように見える。ところどころに、カステラを切つてならべた感じの、団地のむねむね。あいだをぬって、たて・横・ななめと走る道路。

そんなけしきの中に、まるで空からおちてきた大きなハンカチみたいに、くつきりと四角く青



く、光^ひっているものがある。

六年生^{ねんせい}になって、きゆうに背^せののびはじめた窓^{まど}は、つま先^{さき}立^たつて手^てすりから身^みをのりだす。

「なんだろう。海^{うみ}かなあ。」

「海^{うみ}は、そのもつとむこう。ほら、あの、すこしかすんでいるあたり。工業港^{こうぎやうこう}だって、お父^{とう}さんもいったもの。うんと大^おきいのよ。」

「だとすると、なにか水^{みづ}のたまつてるところだな、池^{いけ}とか、湖^{みずうみ}とか……。」

「そうかもしれないね。」

とうなずいてから、エリカはつけくわえた。

「エリカの原^{はら}っぱでないことだけは、たしかよ。」

窓^{まど}とエリカは顔^{かほ}を見^みあわせて、くすんとわらう。

新聞社^{しんぶんしゃ}につとめているお父^{とう}さんは、まだまだわかかったときに、一度^{ひと}だけドイツにいったことがあるのだそうだ。

古い城^{しろ}だったホテルでめざめると、細工^{さいく}がほどこされた重々^{おもおも}しいまどわくのむこうに、広^{ひろ}い広^{ひろ}い高原^{こうげん}がひらけていた。高原^{こうげん}はうすむらさきにぼうつかすんで、あまりにも美^{うつく}しいので、お父^{とう}さんは、ゆめのつづきかと思^{おも}ってしまった。

イギリスではヒースとよばれ、日本ではハナスギともいうエリカの花が、むらがってさく高原だった。

春のはじめのことだという。

わかいお父さんは日本へ帰っておよめさんもらい、男の子が生まれたら「窓」女の子だったら「エリカ」と名まえをつけようと、かたく心にきめたのだそうだ。

窓にしてもエリカにしても、自分の名まえがちよつとかわっていて、いやだと感じないでもない。でも、お父さんがかんしゃくをおこしてどなったりするとき、

「まどの外にはエリカの原が……。」

と、小さな声でつぶやくと、お父さんはたちまちしゅんとなって、どんなお説教もおわりになるので、べんりな名まえでもあると思っている。

「お母さん、お母さんてば……。」

エリカは、またさげんだ。

「うるさいわねえ。それどころじゃないでしょ。夕飯くらいは手づくりのものを食べたいし、さっぱりした部屋でねむりたいし……。二人ともこつちへきて、てつだってちようだいよ。窓はおしこれのそうじ、エリカは食器をだんボールからだして。」

窓とエリカは、しぶしぶ部屋の中へもどる。

二人の一家は、お父さんの転勤で、十一月もすえだというのに、四年間すみなれた日向町からこの千野市のマンモス団地の十一階へ、今朝ひっこしてきたところだった。

都会かぶれの窓は、電車にのれば五十分たらずで都心へでられることになってよろこんでいるし、お母さんは、十一階の三LDKにすめるからって、はしゃいでいる。

でも、エリカだけは、入学から四年二学期までのびのびすごした日向町から去るのが心のこりで、お父さんの転勤がうらめしかった。

日向町には、社宅のすぐうらに、子どもでもらくにのぼれる日向山があつたし、十五分かけ足すると、白い砂の美しい清が浜があつた。

砂浜を、はだして思いつきり走るあの気もちよさ……。

サクラガイは、春夏より冬にたくさんひろえた。生きてぴんぴんはねる魚を、こわがらずに手にもつこともできるようになった。

明子ちゃんや久子ちゃんと毎日海で泳ぐ夏休みのたのしみと、日だまりのマツ林の中に小さな花をさがしだす冬休みののかさともわかれて、ひっこしてきたのだった。

そば屋さんのはこんでくれた月見うどんを、三人で食べる。

「エリちゃん、つかれたの？　元氣だしてね。食器のどんボールは、あと二個でおわりだから、窓は、あの……。」

いわれるまえにさつと立ちあがって、窓はベランダへにげだした。

「あつ、ない……。」

窓がなにかいっているのに、お母さんはうどんの入れものを流し台にはこんだり、納戸からクリナーをだしたりしている。

足音をたてて、窓が部屋へもどってきた。

「エリカ、エリカ、どうしたんだろ。さっきのハンカチ、きえちやつたよ。」

「えーっ、うそでしょ！」

「ほんとさ。見てみろよ。」

エリカもベランダへ走る。

ない。

さっきはたしかに青く光を反射していたあたりに、いまは、黒ずんだ畑のような、校庭のようなものしか見えない。

「いったい、どうしたの？」

ようやく、お母さんがベランダにあらわれた。

「あその団地の左あたりに、青く光る湖みたいなものが見えたの、さつき。けど、いまは、ほら、畑みたいな、空き地みたいなものしか見えないでしょ。」

「ええ、あそこね。そのようだね。」

「さつきは青く光ってたんだよ、な、エリカ。」

窓はエリカをふりかえる。

「そう、青いハンカチみたいだった。」

「ふうん。」

お母さんは目をほそめて、窓の指さす方向を見つめた。

が、すぐ、手すりからはなれて、

「あなたたちの思いがちじゃないの？ さ、かたづけ、かたづけ……。」

いいながら部屋へはいってしまった。

「ちよつといって、見てくるよ、ぼく。」

窓は玄関へ走る。

「だめよ！ いいかげんにしなさいつ。それどころじゃないでしょ。」

お母さんのことばをふりきって、窓はドアの外へきえる。

お母さんはぶつぶつぶやきながら、からのだんボールをベランダへはこんだり、おしいれへふとんをしまったりする。エリカはこれからだしたおさらを、食器戸だなへしまいこむ。

三十分くらいたつたころ、足音をひびかせて、窓が帰ってきた。

「へんなんだよ、あそこ。広い沼みたいなものらしいけど、海とつながってるようなんだ。水路があるのさ。日向町の清が浜へでたときとおんなじにおいもするし、どぶみtainにおいもするし……。そして、鳥がたくさんいるんだ。野鳥だよな。ぼくにわかるのは、カモ・シギ・ユリカモメくらいのもんだ。」

エリカもお母さんも手をとめて、窓を見まもる。

「むれをつくってるんだ。」

「見たい！ わあ、見たい。いつてみていいでしょっ？」

「それどころじゃないのに……。」

「ちよつとだけ。こんどは兄ちゃん、てつだいなさいよっ！」

エリカはジャンパーをひっかけて外へでた。エレベーターで一階へおりる。

ふしぎな青いハンカチがあったのは、太陽がかがやいていた方角だから、そちらへ歩きだす。団地の角をまがり、広場を通りぬけ、道路を横ぎり、もう一度バス通りの横断歩道をわたって、高校のわきをぬけると、頭の上にはばつと空がひろがった。

その下に、コンクリートの岸壁でふちどられた、とほうもなく広い沼が……。

きっちりした長方形。だから、ハンカチのように見えたのだ。

長方形のまわりは、ずっとむこうの対岸も右がわも、岸すれすれのところまで、団地のたてものやふつうの家らしいものやらが、たてこんでならんでいる。

左岸だけは空き地。いちめんかれ草の、なんでもしてあそべそうな原っぱだった。

窓の報告どおり、エリカの立っている岸壁の下は、水をたたえた水路になっていて、その川は左の原っぱを通りぬけ、海のほうにむかっている。

水路は、長方形の沼のまんなかまでつづいていて、ねずみ色の土の中をうねる銀色のおびのようだった。

エリカの立っている岸——、太陽の位置から考えると東岸——は、うしろにある高校とのあいだが、かれ草のはえた空き地と、舗装された道路とになっている。

色のかわったハンカチの正体は、二辺を住宅に、一辺を草地に、のこりの一辺を草地と道路に

かこまれた、やたらに広い沼地だったのか。

とつぜん、噴水のしぶきのように、白いものがぱつと空中にわきあがった。

エリカは息をのんだ。

白いむれは太陽をめざしてさあつと流れ、きゆうにむきをかえると、また太陽にむかい、そんな動きを三、四回くりかえしてから、こい灰色の土の上の白いかたまりとなった。

小鳥のむれだった。

目をこらすと、広い沼地のあちらにもこちらにも、白いむれがあった。

一羽だけで、ぽつんという鳥もいる。

羽毛をさかだてて、ふいてくる風に、長い首をむけて立っている。

水路にかかっている橋をわたって、エリカは、なんでもしてあそべそうな原っぱにはいつてみた。

岸辺近くの、立ちがれている草の中に、いくつも、木のベンチがあった。

形も、つくり方もふざろいで、大工さんがつくったものでないことは、すぐわかる。

ガサツ、ガサツとかれ草をふみしめ、沼の鳥のむれに気をとられながら歩いていくと、丸太とかれ草でつくった小さな小屋にぶつかった。